



秋の教養講座 2018「服装で読み解くフランス文学」 —バルザック『ふくろう党』を例に—



今年も秋の教養講座が、去る11月23日(金・祝)、放送大学奈良学習センターとの共催により、同センターにおいて開催されました。参加者は44名。講師は、大阪府立大学教授で、当協会会員でもある村田京子先生。内容は、小説のなかに描かれている服装に着目し、その服装が象徴している人物の性格と政治的信条との結びつきから、作品の構図を明確にしようというもので、パワーポイントで服装を絵や図版で示しながらの、速射砲のようなトークに思わず惹きこまれてしまいました。

取り上げた作品は、バルザックの『ふくろう党』。フランス革命において、徴募兵制度に不満を持った農民らをバックに、王党派が反革命を展開したという史実を元にしていきます。そこに登場する人物の服装は、農民の着るヤギの皮が獣性と野蛮さ、

共和軍のブルーの軍服はエネルギッシュな共和国の権化、ふくろう党党首の狩猟服に白の帽章は貴族の美しいイメージをそれぞれ象徴。共和軍幹部とふくろう党党首の両者は敵対しながらも率直な気性と男らしさという点で共通していますが、総裁政府になってからの共和派主導者は伊達男姿で偽善と狡猾を表し、まったく対照的。女性はどうかというと、ふくろう党党首を補佐する女性の乗馬服スタイルは男らしさ、パリから共和派のスパイとして送り込まれた女性の洒落女スタイルは貴族性と娼婦性を象徴していますが、結局女性の場合は政治的信条を持つに至らず、感情や情緒によって行動するという風にバルザックは描いているとのことでした。



村田先生のお話の後、質問が次々と出て、緑の眼が狡猾さや悪を表すという話から、フランス人の眼の色は何種類あるかという質問まで飛び出しました。今後、小説や映画に接する場合に、ストーリー以外の、服装などの細かい描写に注意して鑑賞したいというご意見がありましたが、これは今回の講演会参加者が全員感じたことだと思います。



講演終了後、「菜宴」に移動しての懇親会には、会員以外の方6名を含め21名が参加。ジャメ副会長による「老いも若きもフランス人の全員が好き」なバルザックに乾杯の発声の後、お料理とワインを楽しみながら、一人ずつ感想や近況を述べて交流。談論が熱を帯びて当初の予定より大幅に時間超過となるほどでした。(杉谷健治)

講演を終えて 村田 京子

卒業論文、修士論文、博士論文と一貫してバルザックの作品を研究してきましたが、このところジョルジュ・サンドをはじめとする女性作家や、絵画と文学との相関関係を探る上で、ゴーティエやゾラなど他の作家たちに視野を広げてきました。今回の講演を依頼された時、久しぶりにバルザックに戻ってみようと考え、『ふくろう党』を取り上げました。18世紀文学までは登場人物に関して(例えば『マノン・レスコー』)、どのような衣装を纏っていたのか、ほとんど言及がありません。「歴史の秘書」を自認するバルザックが登場して初めて当時のモードに作家が関心を持ち、詳細な描写をするようになりました。そして、服装は社会階級や政治的信条、経済状態や性格までも表すようになったわけです。この講演によって、服装を手がかりに小説を読み解くことの楽しさを味わって頂けたならば幸いです。今後も『人間喜劇』の他の作品や他の作家たちの作品を取り上げ、服装と人物の関係を探ってみたいと思っています。大勢の方々に熱心に聴講して頂き、質疑応答も盛り上がり、本当に楽しいひと時を過ごすことができました。